

地区交通計画プロセスにおける計画案評価手法に関する研究

国土地理院 正会員 三谷麻衣
 埼玉大学 正会員 坂本邦宏
 埼玉大学 正会員 久保田尚
 東京商船大学 正会員 高橋洋二

1、研究の背景と目的

従来の交通計画は行政が計画を作成し、住民には説明をするという一方的な流れであったが、近年の住民参加機運の高まりや、社会実験の広まり、さらにシミュレーション技法の発達による新たな手法の出現等により、今だ明確な形にはなっていないが、新しい地区交通計画プロセス(図1)が次第に作られつつある。本研究の目的は、地区交通計画のための新しい手法(表1)の有効性・課題について、実際の計画の場で利用することによって検討することである。

2、鎌倉今小路歩行者尊重道路社会実験

平成 11 年 11 月 13, 14, 20, 21 日(いずれも土日)に鎌倉今小路歩行者尊重道路の社会実験が行われた。社会実験では、安全な歩行空間を確保するために、交通規制による通過交通の排除、歩行者空間の確保、ハンプなどの物理的デバイスの設置等が行われた。現地には「立ち寄りブース」が設置され、次のような資料・情報が提供された。

A) 鎌倉の交通政策に関する取り組み方を示すポスター

B) 社会実験に関する資料

C) 社会実験が行われる経緯紹介のビデオ(住民参加による「鎌倉駅周辺地区交通懇談会」の様子をまとめた 16 分程度のビデオ)

D) シミュレーション分析結果の紹介ビデオ(普段の休日と実験当日について、今小路通りの交通量、周辺の混雑、移動の不便さの、3 つの視点でまとめたもの)

E) フォトモンタージュ(今小路通りの 3 地点について現況と将来像のコンピュータ合成画像写真)

ブースでは、偶然通りかかった人や実験に関して意見のある人(賛成・反対)などが訪れ、鎌倉市役所の人やボランティアとの対話が行われ、住民と行政との対話の場にもなっていた(図 2)。「立ち寄りブース」を訪れた住民等のうち、47 名が「立ち寄りブース」という試み自体に関するアンケートを回答してくれた。

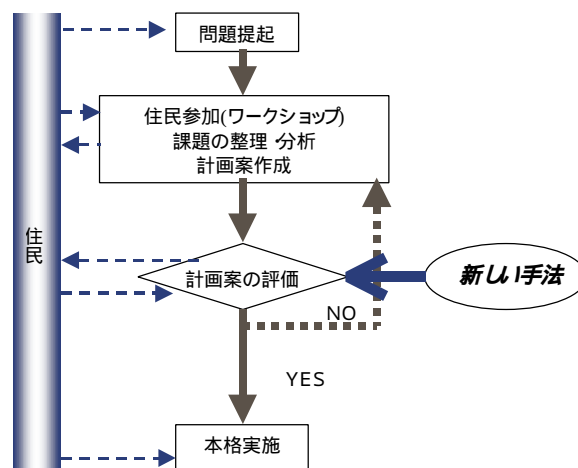


図 1 新しい交通計画プロセスの一例

表 1 新しい手法の一例

1 事前予測型	交通シミュレーション	交通状態の事前予測
	フォトモンタージュ	景観の事前予測
2 体験型	社会実験	施策の有用性の検討 地域の合意形成の促進 問題・課題の明確化
3 行政と住民の交流	立ち寄りブース	行政と住民ともコミュニケーション形成 状況背景の理解促進



図 2 立ち寄りブースでの住民と行政の交流

キーワード：計画プロセス、社会実験、交通シミュレーション、立ち寄りブース

連絡先：〒338-8570 埼玉浦和市下大久保 255 埼玉大学工学部建設工学科 TEL&FAX048-855-7833

3、集計結果

将来イメージ把握に関する質問では、実験参加に加えてフォトモンタージュを見た場合に、最も理解できる割合が多く相乗効果が確認された(図2)。交通シミュレーションについて「この様な地区交通などを考える場合に交通シミュレーションは有効だと思うか」(図3)という問に対して9割以上が「有効」又は「さらに改良を加えれば有効」と答えており、交通シミュレーションの有用性について社会実験の事前予測などといった住民参加の場での使用が効果的であることが確認された。また、分析時間や対象範囲などに対する自由意見も多く交通シミュレーションの期待の大きさがうかがえた。しかし、今回提示した分析について、正確に前提条件や仮定などを理解することができた人は3割～6割に留まり、正確な情報伝達の必要性が指摘できる。

実験や将来計画の理解度に関する「立ち寄りブース(ビデオ、フォトモンタージュ、資料)で、実験計画を検討した懇談会の取り組みを十分理解できたか?」という質問では、8割以上の人々が理解したと回答し、社会実験の背景や実験内容の理解促進につながる事が確認できた(図4)。立ち寄りブースでは、社会実験が行われることを知らなかった人や、事前説明会に欠席せざるを得ない人など、普段は積極的な住民参加を行えない人々が集うことで、住民と行政の対話の場になっていた。計画者が一方的に説明するのはなく、住民がリラックスした対話の中で気軽に質問でき、また計画者にとっても直接住民の声を聞けることで今後の対応を検討するなどといった、住民と行政間で積極的な意見のフィードバックが行われていた。また、立ち寄りブースを含めた社会実験を体験することによる将来の本格整備に対する意識変化については、やや支持できると回答した層が大幅に減少する一方で、支持できる及び支持できないといった明確な意識を持つ層がそれぞれ増加しており、住民意識の変化を誘発していることが確認できた(図5)。

4、まとめと今後の課題

本研究では、実際の社会実験の場における、交通シミュレーションや立ち寄りブースの有用性が確認できた。今後は、交通シミュレーションの内容を専門知識が無い人に容易に伝える方法の検討や、計画に対する住民意識による評価手法への影響などを検討する必要がある。

【謝辞】

本実験は、平成11年度の建設省の社会実験公募制度により実施されたものである。鎌倉市をはじめとする関係者の方々への謝意を表する次第である。

【参考文献】

太田勝敏 編集:新しい交通まちづくりの思想 コミュニティからのアプローチ、鹿島出版会、1999

建設省道路局:社会実験の推進、1999.3、<http://www.moc.go.jp/road/demopro/index.htm>

山崎英海、坂本邦宏、久保田尚:交通施策導入プロセスにおける社会実験の有効性と課題に関する全国調査、土木学会第54回年次学術講演会第4部門、pp.242-243、1999(調査結果は<http://www.dp.civil.saitama-u.ac.jp/>)

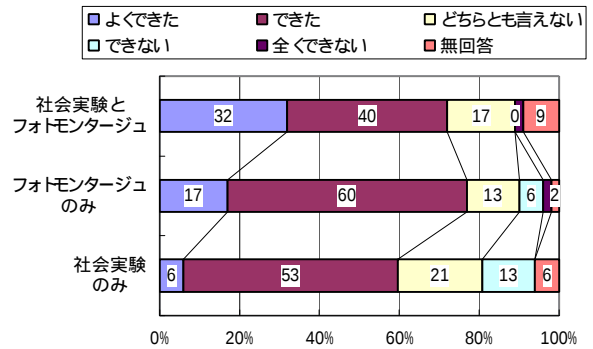


図2 今小路の将来イメージの把握

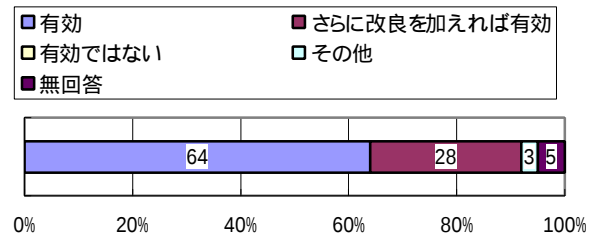


図3 交通シミュレーション分析の有用性

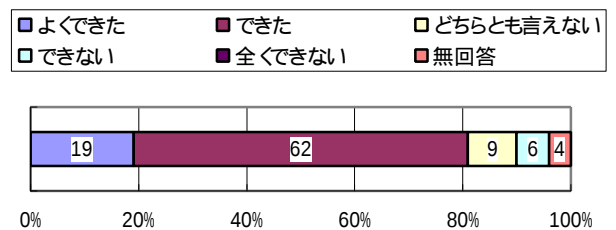


図4 立ち寄りブースによる計画の理解度

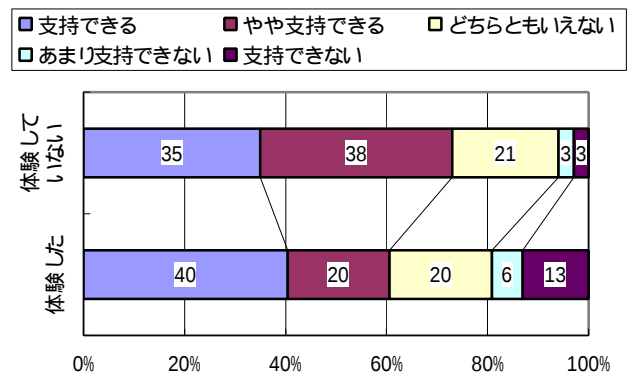


図5 体験有無による将来本格実施への意識差